栩野正喜の勁草塾‥「持続可能性」

私が所属する中小企業同友会上町支部は
「わが社の持続可能性」
をテーマに8月支部例会をするそうだ。

私はコロナ禍から例会には ZOOM 参加していたが
ZOOM 参加者が減って来て
テーマに対する討論がなくなり
その後、加齢もあって参加していない。

その代わり息子が青年部会に参加して
積極的に活動しており
その成長に頼もしくなってきたと実感している。

本来、SDGsには17の目標があるが
うちのような零細企業では
何よりも後継者が大きな要素なので
事業承継を契機に成長していく姿に感激している。

名古屋のお客様は機関誌に
「企業は子孫からの預かり物」
という話を紹介されており
立派に100億円企業に成長されて
ご子息も常務になっておられ、
さらに、漆喰をふんだんに取り入れた新社屋を完成させて
次の世代への贈り物にされている。

私は、息子へ何を贈り物に出来たかと自問すれば
ともかく、会社をつぶさずに来たこと
借金を完済して、少しは余剰金ができたこと
そして、生命線となる成長企業との関係性を濃くしたこと
さらに、未来志向でAIの代理店になった
という風なこと位しか出来ていない。

しかし、有形資産は私個人の所有物だが
事務所はマンションの1室だが約10坪あり5人程度が可能
自宅もマンションで3LDK、実家は2階建ての戸建て
といずれも維持費と固定資産税がマストな物件であり
月額5万円の維持費と年12万円の固定資産税

で済んでいるというアドバンテージがある。

しかし、肝腎の「企業は子孫からの預かり物」という視点では
大事な「企業」を経営者の視点ではなく、
社員の視点も大きな課題と考えている。

「社員」と「従業員」では少し響きが違うと思うが
「自分の仕事に誇りを持ち、子供が入りたいと願う」
という意味で「社員」を定義すると
「企業は子孫からの預かり物」
も「社員」にもあたると考えており、
実は、母が社員を迎えた時に
「〇〇家の大事な息子や娘」
と教えてくれて
うちに勤めてくれた女子社員が東京の次男と結婚して
２人の孫を育ててくれている
という事も密かな個人的な「誇り」である。

【勁草塾のバックログはホームページにあります！】